

<論文>

特別活動における関係づくりの試み —学級活動での構成的グループ・エンカウターの可能性—

興 幸雄 松本市立筑摩野中学校
下田好行 信州大学教育学部教育科学講座

A Plan of Extra-Curricular Activities “Learning about Relationships” —With Structured Group Encounter—

KOSHI Yukio : Chikumano Junior High School
SHIMODA Yoshiyuki : Faculty of Education, Shinshu University

There are few educational practices for learning about interpersonal relationships in extra-curricular activities. Learning about relationships is important for students these days. In this report, a plan of learning about relationships with structured group encounter is suggested.

【キーワード】 特別活動 学級活動 関係づくり 構成的グループ・エンカウター

1. はじめに

生徒たちは、学校生活の大部分を学級集団の中で過ごしている。いじめ、不登校といった問題が深刻化している昨今では、生徒たちにとって学級集団に適応できるかどうかは大きな意味をもっている。したがって、学級集団や生徒たちが属する集団において人間関係能力を身につけることが必要となってくる。

かつては、人間関係を学ぶ場が多く存在し、その中で、生徒たちは人間関係能力を身につけていった。ところが、現在ではその場が少なくなったため、生徒たちの人間関係能力は低下していると考えられる。人間関係能力を身につけることが困難な社会状況があるのであれば、何らかの対応がなされなければならない。ことに学校の中で人間関係能力を身につける必要性があるのである。

そこで、本稿では、特別活動の学級活動の時間における関係づくりの試みから、その意義と課題を明らかにすることを目的としている。関係づくりには、主に構成的グループ・エンカウターの手法を用いて行った。

2. 特別活動における関係づくりの必要性

2.1 関係づくりの必要性

筆者はこれまでに、関係づくりの重要性について明らかにしている（興 2001）。そこ

では、人間関係能力を身につけることを「関係づくり」とした。また、人間関係能力の低下、人間関係能力低下の背景についてふれた。そのうえで、人間関係能力を身につけさせることが急務であるとした。筆者が考える関係づくりは、具体的には今まであまり話をしたことのない生徒たちが仲良く話をするようになること、そのことをきっかけに集団の一員としての所属感をもつようになることである。そして身につけた人間関係能力を場面に応じて適切に発揮し、他者との友好関係を築くようになることである。

2.2 特別活動における関係づくり

これまで、特別活動において人間関係能力を身につけることはあまり注目されていなかった。平成10年12月の中学校学習指導要領の第四章「特別活動 第1 目標」には次のような目標が掲げられている。

「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間の生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。」

「望ましい集団活動」は、「第2 内容」に盛られた学級活動、生徒会活動、学校学校行事を通して行われる。ところが、「学級活動をはじめ、各種の活動場面で、話し合いの場面」が多く、「このため、話し合いの技術や方法を子どもたちが見につけることが大切になる」とされてきた。そこで重視されるのは、「発表の仕方、メモやノートのとり方、司会や書記の仕方、班の意見や考えを学級全体に発表する仕方など、話す、聞く、書く、読むなどのコミュニケーション技術の基礎・基本の習得に関すること」である（南本 2001）。

また、特別活動の「直接の目的は子どもたちの集団生活における自己実現」であり、「望ましい集団でなければ子どもたちは自己実現できない」とされながら、関係づくりがおざなりになっていた傾向が否定できない（高旗 2001）。

筆者は、この関係づくりのための技法を構成的グループ・エンカウンターに求めた。構成的グループ・エンカウンターにはエクササイズとシェアリングという2つの活動の柱がある。エクササイズとは教師の考えるねらいを達成するために用意された課題である。授業のねらいを達成するための「展開」の部分に当たる。シェアリングとはわかちあいやふりかえりのことである。エクササイズを振り返ることによって、そこでの気づきや感情を明確化し、ねらいを定着させる働きをもっている。エクササイズでの一人の生徒の気づきや感情を全員が共有する働きもある。シェアリング中に行われる自己開示によって、学級や学年集団が共通の感情や気づきを分かち合うことが期待されている。この活動が話し合い中心だった従来からの学級活動の指導に関係づくりという視点を補うものと考えたのである。それでは、構成的グループ・エンカウンターとは具体的にどのようなものだろうか。次に構成的グループ・エンカウンターについてみていく。

3. 特別活動と構成的グループ・エンカウンター

3.1 構成的グループ・エンカウンター

構成的グループ・エンカウンターとは、人間としての自分の生き方を検討するサイコエ

デュケーション(心理教育)の一方法として國分康孝らによって開発された。これは近年、人間関係を学ぶ有効な方法として、学校教育でその存在が認められつつあるものである。当初、学級の間人関係を深めるために学級活動の時間に適用されることが多かったが、各教科、道徳での適用実践も報告されるようになった(國分 1997)。

3.2 対人関係ゲーム・プログラム

対人関係ゲーム・プログラムとは、構成的グループ・エンカウンターを基礎とし、学級になじめない子に焦点を当てたプログラムである。これは、田上不二夫らのグループによって、「不適応を起こしている子どもが、対人行動を含んだ遊びによって、学級になじんでいくための援助技法」(田上 1999)として開発された。集団になじみにくい生徒たちの不安や緊張を、遊びによって緩和し、楽しくリラックスした機会を与えることを目的としている。また、集団になじみにくい生徒たちや受けいれる学級全体の成長を援助することも目的としている。構成的グループ・エンカウンターと対人関係ゲーム・プログラムは、理論的背景や目標に違いが見られる。また、エクササイズと呼ばれるものも、構成的グループ・エンカウンターが教室などの比較的狭い空間で行われるのに対し、対人関係ゲーム・プログラムは野外などの比較的広い空間で行われ、運動量も多い。中でも大きな違いは対人関係ゲーム・プログラムではシェアリングを必ずしも重視しないという点である。田上は対人関係ゲーム・プログラムが「ゲームの中で何が起きているか、その影響として効果を考察する」ものとしているからである(田上不二夫 1999)。対人関係ゲーム・プログラムでは身体反応が重視されているのである。しかし、望ましい人間関係の確立には同様の効果があると認められている。

3.3 実際の流れ

構成的グループ・エンカウンターは次のような流れによって行われる。

①ねらいと内容の説明

始めに、ねらいと大まかな内容を説明する。心の準備と期待をもたせるためであり、ごく簡単に済ませる。

②ウォーミングアップ

リレーション(関係)づくりと心身の準備運動をする。自己紹介やだれもが楽しめるようなゲーム要素の強いミニ・エクササイズによって集団の中に信頼感・安心感をもたせる。エクササイズで、グループに分かれる時は、この過程でグループ分けをする。子どもたちの発達段階や集団の雰囲気をも勘案し、抵抗を起こさせないことが第一とされる。

すでに集団に十分な人間関係があるときは、リレーションづくりに時間をかけなくてもよく、直接目的のエクササイズに入ることも可能である。

③ウォーミングアップに対する教師のフィードバック

ウォーミングアップに対して簡単な振り返りをする。

④インストラクション

エクササイズのねらい・内容・ルールを説明する。わかりやすく伝えることが重要で、

場合によっては、実際にデモンストレーションを行う。

⑤エクササイズ

その時の目的となる活動である。(前述)

⑥シェアリング

エクササイズを振り返り、感じたことを仲間と分かち合う。構成的グループ・エンカウンターでは、重要な要素でもあるが、対人関係ゲーム・プログラムではやらないこともある。

⑦まとめ

子どものよかったこと、場合によって次に気をつけて欲しいことをフィードバックする。エクササイズによっては、心的に傷つく生徒もいるので、そういう生徒に配慮する。

3.4 エクササイズの種類

構成的グループ・エンカウンターによると、エクササイズの種類は次のような目的によって分類される。

自己理解・他者理解・自己受容・自己発見・感受性の促進・自己主張

これらのエクササイズを、教師が学級集団の状況によって配列を考えるのである。

3.5 エクササイズ中に配慮する点

教師は、進行の時間管理と臨機応変なプログラム変更のほか、エクササイズ中の生徒たちの参加の仕方、感情、グループ内のコミュニケーション、グループの雰囲気を観察し、状況に応じた介入を行う。介入する場合は、エクササイズのやり方の理解が不十分な場合、ルール違反があった場合、エクササイズに積極的でない場合、グループでのコミュニケーションが滞り、グループでの課題達成や意志決定がむずかしくなっている場合、心的外傷を受けた生徒がいた場合等である。

3.6 シェアリングのやり方

エクササイズが終了した後、次のように教師が指示をして、生徒たちの発言を促すのが一般的である。

「では、これから今のエクササイズを通して、学んだこと、感じたこと、疑問に思ったことを何でも話し合ってください。」

学級の実態やそのときの進行状況に合わせてグループや全体で行う。

このとき、一人ひとりの考えをお互いに理解し、認め合う人間関係を作るために、慣れるまでは、「発表し終わるまでは他の人は発言せず、黙って聞くこと」「友達の考えを理解するための質問はしていいけれど、否定したり攻撃したりはしないように」と細かく注意を与える必要がある。

3.7 特別活動と構成的グループ・エンカウンター

前出の中学校学習指導要領の第四章「第2 内容 A 学級活動 (2)一ア」には、「青年期の不安や悩みとその解決、自己及び他者の個性の理解と尊重、社会の一員としての自覚と責任、男女相互の理解と協力、望ましい人間関係の確立、ボランティア活動の意義の

理解など」があげられている。筆者は、構成的グループ・エンカウンターによる集団体験が、この内容にふさわしいと考えた。そこで、学級活動の時間に、関係づくりに重点をおいた実践を行うことにした。

4. 関係づくりの実践

4.1 関係づくりの学習の方法

この実践は中学 1 年生を対象としている。関係づくりは、主に学級活動の時間に行う。入学したばかりの時期は、生徒たちの緊張と不安が大きい時期である。入学時の緊張を解き、1 学期のうちにできるだけ早く人間関係をつくる必要がある。

そこで、入学してから夏休み前までの期間に 6 時間の学級活動の時間を関係づくりの時間にした。計画した学習は以下の通りである。学習 1 は対人関係ゲーム・プログラムの方法を、学習 2 以下は構成的グループ・エンカウンターの方法を用いた。

学習 1 くまがり

学習 2 ブレーンストーミング「割り箸の使い方」

学習 3 SOS～砂漠からの脱出

学習 4 田川清掃をふりかえって

学習 5 友だちのよさと気になる自画像

学習 6 協力・責任・ふれあい

このプログラムは、以下の点を意図した。

- ・非言語活動のエクササイズから言語活動のエクササイズ。
- ・話合いの方法の確立。
- ・擬似的な体験から奉仕活動・学校行事などの実際の体験

4.2 関係づくりの学習の内容

以下に示すのは、関係づくりの学習の内容である。

学習 1 くまがり

新しい学級集団や仲間との出会いの中での緊張感を払拭する目的で行う。「くまがり」というゲームを通して、チームで作戦を立てたり、協力したりする雰囲気を作る。このエクササイズの目的はと自己主張である。

学習 2 ブレーンストーミング「割り箸の使い方」

自分の思いつきや考えを否定されることなく自由に発言する活動を通して、抵抗感なく発言できる雰囲気をつくる。この目的は自己主張である。

学習 3 SOS～砂漠からの脱出

グループの乗った飛行機が、砂漠に不時着したという想定のもとで、合意形成をする活動を通して、メンバー相互の協調性を高める。この目的も自己主張である。

学習 4 田川清掃をふりかえって

2 時間弱の田川清掃（ゴミ拾い等の奉仕活動）をふりかえり、田川清掃の意義やそのときに見つけた友達のよさを確認する。この目的は他者理解である。

学習5 友達によさと気になる自画像

言葉の選択・比較を通して、学級内の人間関係を深める。肯定的な言葉による支持により、自尊心を高め、和やかな人間関係をつくる。できるだけ肯定的な言葉を30個提示し、その中から自分やグループのメンバーのイメージにふさわしいと思われる言葉を一人につき三つ選択させる。選んだ言葉を発表し、聴きあう。この目的は自己理解である。

学習6 協力・責任・ふれあい

学年行事であるキャンプに向けて、「協力・責任・ふれあい」の具体的な姿を思い浮かべる。また、「協力・責任・ふれあい」のために、どんなことが重要かをグループで話し合う。この目的は自己理解、他者理解である。

4.3 実践の考察

この実践を生徒のアンケートと生徒の感想から考察をする。

①アンケートから

この実践において、自己主張、他者理解（他者受容）がどれだけ進んだかを見るために生徒にアンケートを学習後にとった。

「くまがり」「割り箸の使い方」「SOS～砂漠からの脱出」の学習で「あなたは恥ずかしく相手に人に話すことができましたか。」という質問をした。「くまがり」で「たいへんよくできた」、「どちらかといえばよくできた」と答えた生徒は全体の67.6%であった。「割り箸の使い方」で「たいへんよくできた」、「どちらかといえばよくできた」と答えた生徒は全体の76.0%であった。「SOS～砂漠からの脱出」で「たいへんよくできた」、「どちらかといえばよくできた」と答えた生徒は全体の64.0%であった。

「割り箸の使い方」と「SOS～砂漠からの脱出」の学習で「あなたは、人の考えを否定したり攻撃したりせずに聞くことができましたか。」という質問をした。「割り箸の使い方」で「たいへんよくできた」、「どちらかといえばよくできた」と答えた生徒は全体の71.6%であった。「SOS～砂漠からの脱出」で「たいへんよくできた」、「どちらかといえばよくできた」と答えた生徒は全体の45.1%であった。

「割り箸の使い方」の学習で「あなたは相手の人が話している時に、話す人の身になり、話しやすいように考えながら聞いていましたか。」という質問をした。「たいへんよくできた」、「どちらかといえばよくできた」と答えた生徒は全体の76.0%であった。

「SOS～砂漠からの脱出」で「人の考えを否定したり攻撃したりせずに聞くこと」のポイントが比較的低かったが、他は高いポイントを示していた。このことから、これらの学習によって自己主張、他者理解（他者受容）が進んだといえる。

②ポートフォリオから

次に、生徒の感想から考察する。生徒の感想は記録用紙によるものである。観点は次の3点である。

- ・ 級友の考えを否定しないで聴くことができていたか。（他者理解・他者受容）
- ・ 自分の考えを級友の前で抵抗なく言えるようになったか。（自己主張）

- ・ 級友の良さに気がついているか。(他者理解)

以下にこの観点から抜き出した感想を示す。

学習1 くまがり

- ・ どの人が「上手だなあ」とか、「足がはやいなあ」ということがすごくよくわかりました。(I生)
- ・ 今日のエクササイズは楽しかった。みんなと少しだけ仲良くなったような気がする。(O生)

学習2 割り箸の使い方

- ・ みんなの色々な意見がとてもおもしろかったです。4班は34個も見つけました。すばらしい。(K生)
- ・ みんないろいろな意見をだしていたので楽しかった。発想が豊かでよかった。どの班もおもしろい意見がでてよかった。(Y生)
- ・ 友だち(班の人)とも話せたから収穫はあった。(M生)

学習3 SOS～砂漠からの脱出

- ・ 班のみんなと協力してやることは大変だと思った。けど、楽しくできて良かったです。(T生)
- ・ 人の意見を聞くことは大事だと思った。(Y生)

学習4 田川清掃をふりかえって

- ・ N君が落ちている小さなゴミもちゃんと拾っていた。みんな工夫をしてゴミをもっていたところがいい。みんな真剣にやっていたところがいい。みんな、それぞれの意見をもって発表していた。みんないい意見を言っていた。発表はうまかった。もつとはずかしがらずに意見をだせば良かったと思う。(S生)
- ・ Fさんが、とれそうにないゴミをあきらめずに拾っているのがよかった。両手いっぱいゴミ袋を持っている人がいてよかった。やると聞いた時の気持ちは、ほとんどの人が「めんどくさい」だった。けど、やり終わったときの気持ちはめんどくさいと言っていた人も「楽しかった。たくさん拾えてよかった」と言っていたのですごくよかった。みんな同じ気持ちを持っているということがわかった。(Y生)
- ・ S君、H君、O君、M君が真剣にやっていた。みんなでやってきれいにできておもしろかったです。(K生)
- ・ 来年もまたやりたいという意見はすごいと思った。(N生)

学習5 友達の良さで気になる自画像

- ・ 人のいいところがわかった。(M生)
- ・ この授業でその人のいろいろなことがわかりました。(Y生)

学習6 協力・責任・ふれあい

- ・ いっぱい意見がでて良かった。A君がいっぱい出してすごいと思った。(N生)
- ・ おもしろかった。いろんな意見がいっぱい出た。楽しかった。協力・責任・ふれあい

の意味がわかった。みんないい意見だった。(S生)

- ・ たくさん意見がでてびっくりした。いっぱい大切なことが見つかった。キャンプは協力・責任・ふれあいをしっかり頭にいれて行動したい。(K生)

「級友の考えを否定しないで聴くことができていたか。」は、構成的グループ・エンカウンターでいうところの他者理解であり、他者受容である。したがって、ここでは、級友の考えを認めることができているかをみた。興味深いことは自己理解の目的で行った学習5の「友達の良さで気になる自画像」が他者理解を進めたことであった。班員の友人を見る考え方が自分の見方にも影響したのであろう。

「自分の考えを級友の前で抵抗なく言えるようになったか。」については、ブレンストーミングの手法をとり入れた学習で、その効果が見られる。また、学習の全体を振り返った中に、「いつも紙に書いてから発表するから言いやすかった。」、「必ず考える時間をとってくれるのがいい。」という記述もあった。

また、「級友の良さに気がついているか。」では、学習の中に、教師が意図して、そのことを問えば、学習4のように当然表れてくる。しかし、その他の学習の中でも見られたのは、関係づくりの成果といえるのかもしれない。

5. 関係づくりの意義と課題

5.1 関係づくりの意義

この関係づくりの実践は、生徒たちに好評であった。感想にも「楽しい」という記述や肯定的な反応が多かった。今回の実践から次のことが考えられる。

- ① 特別活動の時間(学級活動の時間)に関係づくりの学習を意図的に計画することができた。
- ② 他の学校行事と関連させて関係づくりの学習を行うことができた。
- ③ 関係づくりの学習は話合いのうえでも有効である。
- ④ 構成的グループ・エンカウンター、対人関係ゲーム・プログラムは関係づくりに有効である。

①については、特別活動に構成的グループ・エンカウンターの手法をとり入れたことからいえる。これまでどちらかというと学級の問題の話合いや学校行事の計画が中心だった学級活動の時間に「関係づくり」という新たな視点を設定することができたといえるのではないだろうか。また、今回は中学1年生が入学してから夏休み前までの期間に6時間の学級活動の時間を関係づくりの時間にあてた。このことで、教師の意識の中に1学期を「関係づくり」として位置づけることができた。

②については、キャンプなどの学校行事とも関連させて、構成的グループ・エンカウンターのエクササイズを考案したことからいえる。生徒の感想の中に「すごく楽しかった。協力してがんばる。仲よく楽しいキャンプにしたい。」とあった。関係づくりの学習が学校行事に対して前向きな気持ちを持たせることにつながっていたことがうかがえる。全体の楽しい様子が学級の雰囲気づくりにも効果があったといえる。学校行事の学習と関連させ

た関係づくりが可能であるということがいえる。

③については、学級のなかに、話すときの態度や聞くときの態度が学習を通して意識されていたことからいえる。「友達によさと気になる自画像」では、特に教師側で「聞くことに集中させる、相手にしっかり伝えさせる、という意図」があった。構成的グループ・エンカウンターエクササイズは多くの自分の考えを伝えたり、友人の意見を聞いたりする内容が多いので、「聞く」、「話す」といった話し合いの技術の習得にも有効であったといえる。学習4の「田川清掃をふりかえって」の感想に次のようなものがあった。

「みんなそれぞれの意見をもって発表していた。みんないい意見を言っていた。発表はうまくいった。もつとはずかしがらずに意見をだせばよかったと思う。」

よりよい話し合いをしようとする意識が感じられる。

(4)については、構成的グループ・エンカウンター、対人関係ゲーム・プログラムといった方法が、生徒の感想に見られるように「おもしろい」「楽しい」と感じるものであったことからいえる。また、授業後のアンケートからもいえる。学習1の「くまがり」で、「楽しかった」、「少し楽しかった」と答えた生徒たちは全体の83.7%であった。学習2の「ブレインストーミング『割り箸の使い方』」では、「楽しかった」、「少し楽しかった」と答えた生徒たちは全体の80.6%であった。学習3の「SOS～砂漠からの脱出」では、「楽しかった」、「少し楽しかった」と答えた生徒たちは全体の58.1%であった。学習6の「協力・責任・ふれあい」では、「楽しかった」、「どちらかといえば楽しかった」と答えた生徒たちは全体の92.0%であった。学習3の「SOS～砂漠からの脱出」は、合意形成が難しかったことが他より数字が低い理由であろう。しかし、いずれも多くの生徒たちが「楽しい」と感じていたことがわかる。構成的グループ・エンカウンターの方法を用いることで、現実からやや離れた擬似的な空間が作り出された。このことが、お互いの意見を言いやすい雰囲気を作りあげた。関係づくりの面でお互いの考えを認め合うことができていた。さらに、「友達によさと自画像」や「田川清掃をふりかえって」のなかで、生徒たちはお互いの長所に着目することができていたといえる。「仲よくしなさい。」という指示よりも、学級の中の雰囲気を和らげ、生徒の人間関係能力を高めることが有効であったと考えられる。

5.2 課題

今回の実践では、生徒たちのアンケートと感想から考察を加えた。学習の検証についてはより客観性を帯びた方法が必要であろう。また、構成的グループ・エンカウンター、対人関係ゲーム・プログラムの内容も、どのような内容が生徒の関係づくりにおいてよりふさわしいかを、今後吟味していく必要がある。

文献

國分康孝，1999，第3章「エクササイズ集」，國分康孝監修「エンカウンターで学級が変わる中学校編 Part 3」，図書文化，70-142

- 奥幸雄・下田好行，2001，自己の生き方を考える総合的な学習の実践に向けた試みー関係づくり・自分づくり・人の生き方に学ぶ学習の枠組みづくりを中心としてー，信州大学教育学部附属実践総合センター紀要「教育実践研究」，2，55-64
- 南本長穂，2001，第3章「内容と目的の理論」，相原次男・新富康央編著，「個性をひらく特別活動」，ミネルヴァ書房，39
- 田上不二夫，1999，「対人関係ゲームと群れづくり」，田上教育臨床研究会編「第4回人間関係づくり講座研修会報告書」，1
- 田上不二夫，1999，「対人関係ゲームと群れづくり」，田上教育臨床研究会編「第4回人間関係づくり講座研修会報告書」，2
- 高旗正人，2001，第3章「目的論」，相原次男・新富康央編著，「個性をひらく特別活動」ミネルヴァ書房，18 - 19

(2002年3月31日 受付)

(2002年7月1日 受理)